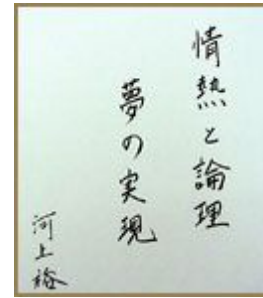




慶應義塾大学医学部教授
河上裕

自分の人生は自分で切り拓く 競争が社会の活力の源泉



昭和55年(1980年)慶應義塾大学医学部卒業
 昭和55年(1980年)慶應義塾大学病院内科研修医
 昭和57年(1982年)国立大蔵病院内科
 昭和59年(1984年)慶應義塾大学医学部内科(血液内科)助手
 昭和60年(1985年)米国南フロリダ大学医学部免疫学教室Research Associate
 昭和62年(1987年)米国国立衛生研究所外科(NIH)
 米国国立癌研究所(NCI)外科Visiting Fellow
 平成元年(1989年)カリフォルニア工科大学(Caltech)
 生物学教室(国内留学6カ月)
 米国国立癌研究所外科Visiting Scientist
 平成9年(1997年)慶應義塾大学医学部 先端医科学研究所
 細胞情報研究部門教授

3年のつもりが12年となった米国留学

「挑戦する」姿勢に共感

私が米国に留学したのは29歳の時でした。それまではなんでもできる内科医を目指して臨床をしていましたが、免疫学に興味を持ち、本格的に勉強してみようと思ったのが動機です。

しかし、最初に行った大学では思うような研究ができなかったため、すぐに米国国内でポストを募集している大学や研究機関を再度探しました。幸いにもNIH NCI(米国国立衛生研究所 米国国立癌研究所)のVisiting Fellowのポストを得ることができましたが、ここまでに1年半の時間を費やしてしまいました。

NIHに移ってからの研究は充実しており、特にBossのステーブ・ローゼンバーグ博士の研究に対する姿勢には随分と教えられました。ローゼンバーグ博士は同じ研究テーマ「癌の免疫療法」で何十年にもわたり基礎研究と臨床試験を繰り返し、今はやりのトランスレーショナルスタディを続け、「Try and Error」を重ねながらも確実に研究を進展させました。次々に目新しいテーマに変える研究者が多いなか、博士のような姿勢は貴重です。

私が影響を受けたもう一人の研究者は、カリフォルニア工科大学(Caltech)に行った時に出会ったリロイ・フッド博士です。フッド博士は1989年当時、すでに今さかんなコンピューターと最新の生物実験法を駆使した大規模な遺伝子蛋白解析法を用いて、生物学の謎に挑戦していたのです。

私がCaltechにいたのはほんの6カ月ですが、彼から受けた影響はそれ以上のものがあります。今でも覚えているのは「生物学の謎を解くには まず謎を解くための技術を開発することが重要だ」という彼の言葉です。既知の技術を用いて、分子を一つずつ追っていた私には衝撃的でした。この経験が生きて、NIHに戻ってからヒト癌抗原のクローニングに成功したと思っています。

基礎研究と臨床試験を繰り返して医学研究を進めるローゼンバーグ博士、当時の最新技術を用いて自ら開発した網羅的分子解析法を用いて研究を進めるフッド博士、一見両極端の研究者ですが、彼らはジョンズホプキンス大学の学友で互いに尊敬しあっていました。手法は違いますが、彼らの研究に「挑戦する」という姿勢には共通するものがありました。

米国の強さの秘密

トップでもふるいにかけられる

よく「米国の医学教育は素晴らしい」という話を耳にします。12年間、米国で研究者をしてきた私にはその言葉がよく分かります。日米の差は、端的に言ってしまえば国力の違いです。ただ「国力＝財政」だけではありません。文化、風習そしてそれらを作る教育が違うという意味です。経済学の世界では生産の三要素を「ヒト・モノ・カネ」と

組織のトップであっても「ふるい」にかけられます。ただし、日本との違いは、次の働き場所が見つけやすいことです。これは日本の流動性の問題です。日本も経済界では能力主義、リストラが行われていますが、大学では今だに能力に応じた処遇がなされていません。問

いいですが、医学研究の場では、「設備・資金・情報・人材そして研究材料」が必要です。このうち、設備と資金に関しては今や日本もそれなりに立派なものをもっています。情報もインターネットなどを介して手に入りやすくなりました。問題なのは、人と研究材料です。

米国は世界中から優秀な人材を集める魅力を持っています。この魅力の源泉にあるのが彼の国の風土なのです。日本では優秀な若い人が、必ずしも十分に能力を発揮できる場を得られませんが、米国では能力があれば、それなりに処遇されます。社会全体がそれを受け入れており、20歳年下のBossが来て、「その人に才能があるならば」誰も文句は言いません。

これに加えて米国社会には絶え間ない「競争」があることも社会を活性化させている要因です。私もNIH時代に何度もセレクションにさらされました。NIHの私のいた部門では3年目、5年目、8年目にセレクションを受け、能力が伴わないと思われたものは去らなければなりませんでした。

若い医師のみなさんへ

自分の人生は自分で切り拓く

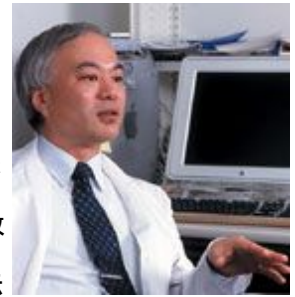
日本に戻ってきたのは41歳の時でした。NIHに残る選択もあり、随分迷いましたが、母校・慶應義塾大学医学部に新たに先端医科学研究所ができ、NIHにいるよりも自由に研究が拡大できるかもしれないと思い、日本に戻ってきました。NIHでは7人だった自分のグループも日本では30人以上になり、設備も米国に引けを取らないものになっています。研究材料も臨床の先生方と協力し思いどおりとは行きませんが、少しずつですが体制は整いつつあります。しかし、考えるのはやはり教育の問題です。

今は大学で入試の面接をしたり学部生に授業をしたりしていますが、日本の学生は米国の学生に比べると積極性に欠けると思います。NIH時代、米国の現地校に通っている日本人の小中学生に癌の講義をしたことがありますが、授業後、どんどん手を挙げて質問してくるのには驚きました。これに対し、日本の学生は「質問もろくにしないで、入試の面接でも大きな夢のない学生たちが多いことに気づきます。私たちはもっと夢のある情熱をもった学生を育てなければなりません。

米国では「自分の人生は自分で切り拓く」「それぞれの個性を活かす人が素晴らしい」ということが当たり前になっています。その人の特性を活かして社会に貢献することが尊しとされているため、ローゼンバーグ博士やフッド博士のような個性ある研究者が輩出するのです。

題なのは、能力のある優秀な人材を活かす機会が減ってしまうことです。

もう一つは研究材料の問題です。これは日米の文化の差が如実に表れるところです。米国では新しい技術が生まれ、それ以前の法律や倫理に合致しない場合には、法律の方をどんどん変えていきます。遺伝子研究・再生医療・臨床研究、こうした研究でヒトの細胞が必要になり、その成果が多くの国民のためになる場合には、米国はガイドラインや法律を真剣に見直して、可能であれば研究ができる体制にしてしまうのです。移民国家で様々な人種の意見を調整してきた伝統でしょうが、このあたりのしなやかさは日本にはまだ欠けています。またよくいうボランティア精神も日本よりは随分あると思います。



海外に行くと様々な国の留学生たちに出会います。特にアジア諸国から来た留学生は寝食を忘れて研究に励んでいます。豊かな欧米諸国の学生も貪欲に研究し結果を出しています。何といても科学するのに必要なのは「夢と情熱と論理」だと思います。その背景にあるのはやはり「自分の人生は自分で切り拓く」という覚悟なのだと思います。そうした人たちに触れていくことがその後の糧となるのではないのでしょうか。



[BACK](#)